に文章二篇を發表する。

昭和八年（三十七歳）

二月四日、父、信吉（八十歳）死去。

「ホトトギス」に、二篇、「玉藻」に三篇の文章發表。この年、五月「花鳥巡禮」の稿を起し、「ホトトギス」（十二月號より登掲され、三十二篇（昭和十一年七月終稿）に及ぶ。

昭和九年（三十八歳）

「玉藻」に五稿、「俳句研究」に六稿を發表す。二月二十三日、母の七周忌を修した。

五月十九日より、第一生命保險相互會社内「あをきり句會」の選をはじめ指導に任じる。（歿年まで、機關誌「あをきり」に毎號近詠を發表し、雜詠選並に指導的文章をも掲載する）

六月、「ホトトギス」同人に推擧された。

十月、玉藻社より第一句集「川端茅舍句集」發刊。

大正十二年秋より、昭和八年八月迄の虚子選の作品を收錄する。この句集は中村秀好の斡旋による。

昭和十年（三十九歳）

「玉藻」に一篇、「俳句研究」に三稿、「ホトトギス」に十二稿を發表する。

五月十八日、石神井に吟行する。

十月二日、離京。四日、生駒山上、五日、和歌山市父母の墓參、七日、八日、九日、京都。

（三月十六日の日記に「精神も肉體も危機の感あり」とあるも、この年西下敢然旅行を決行した）。

昭和十一年（四十歳）

一月二十日、龍子二女和歌子死去、哀惜す。「ホトトギス」へ十稿、「俳句研究」二稿、「玉藻」その他へも數稿を發表、しきりに佛書を耽讀病臥の生活をつづけた。食慾旺盛。

二月十六日、高濱虚子、外遊出發。

四月九日、中耳炎、蓄膿症、丹毒を一時に病む。五月に入りやや輕快。

六月十五日、高濱虚子歸朝、横濱に出迎へる。七月十日、丹毒のため、ギプスに寢ることが出來なかつ

たが再びギプスに寢る。この頃、「ホトトギス」雜詠選を見る。

十二月六日、「あをきり」會員と共に、行德に吟行千鳥を見る。「盧刈千鳥」の作あり。

昭和十二年（四十一歳）

「ホトトギス」八稿、「俳句研究」八稿、「玉藻」その他に數稿を發表。「ホトトギス」雜詠豫選、概ね病臥の作句生活をつづく。

この年、毎月のごとく、「あをきり」會員と共に、上野花山亭、鬼子母神、柴又、手古奈堂、豐島城址、多摩川、清澄公園、兎月園、日比谷公園、後樂園等に吟行した。

六月、「あをきり」會員と共に鹿島香取へ旅行した。

昭和十三年（四十二歳）

「ホトトギス」七稿、「俳句研究」八稿、「誹諧」に俳諧詩その他數稿を發表す。概ね病臥。

六月九日、修善寺行、十日、墓參、十一日歸京。

昭和十四年（四十三歳）

「ホトトギス」へ十三稿、「俳句研究」へ八稿、「玉藻」「誹諧」その他へ多く執筆する。

一月一日、日光へ行き即日歸京す。

二月一日、和歌山へ出發。二日、父の七周忌法要。

三日、修善寺着、休養、五日、歸京した。

三月、大磯鴫立澤、鴫立庵に吟行。

四月、發熱、左肺苦痛の日多し。

五月十五日、第二句集「華嚴」龍星閣より發刊、昭和八年より昭和十四年迄の句を收錄する。

六月八日、出發九州行。九日志波小野房子邸着。十一日、俳句大會出席。十三日、秋月吟行。十七日、句會。十八日、太宰府吟行。二十日、福岡出發歸京した。

昭和十五年（四十四歳）

「ホトトギス」へ十九稿、「俳句研究」へ七稿、その他へ數稿を發表した。

一月以來、咳、猛烈、呼吸困難、頭痛、喀血、齒痛、